



#22

タワー・マジキ・パイ・イン

著：監澤たすく
イラスト：かもめ遊羽

「こーちゃん、大丈夫?」
「ん……もう、平気……」

通勤通学ラッシュでこったがえす駅のベンチに横たわった少年は、濡れたハンカチを差し出す少女に弱々しく返事をした。

「まだ、遅刻の時間じゃないからもう少し横になってなさいよ」

「うん、ごめん、あかり……でもあかりは先に行った方がいいんじゃない?」

「いーからいーから。幼なじみに遠慮なんかしないしな!」

あかりと呼ばれた少女——上野灯火——はハンカチを軽く絞ってからそっとこーちゃん——土師幸司——の額に乗せる。

ひんやりとした心地よい感触に、幸司はふう、と安堵の息をついた。

「さっきの満員電車で、隣にすっごい偏頭痛持ちのOLさんが来ちゃってさ……それがダイレクトに伝わってきちゃって……もう頭ん中でぐわんぐわん鐘鳴らされてるみたいで……あんな状態でも仕事に行かなくちゃいけないのかな……社会人って大変だね……休めばいいのにな……」

「あー、だからあんな青い顔して立ってたんだ、二人とも」

あかりは、なるほどね、という顔で頷いた。

幸司は人にはない能力を持っている。

それは「一番近くにいる人の病気の症状を自身の体に反映する」という能力だった。

先の例で言えば偏頭痛持ちのOLさんの偏頭痛を、幸司もリアルに味わってしまったというわけだ。

「なんで僕だけこんな能力あるんだろう……全然役に立たないし、損ばっかりだし……ホント神様、不公平だよ……」

「でも、人の痛みが判るって大切なことだと思うな。あたし、そういうの嫌いじゃないよ」

「あかりは体験したことがないからそんなこと言えるんだよ。これ大変なんだから、ほんとに……」

幸司は少し泣き顔になって、甘えるようにそう言った。

ベンチの二人を通勤・通学客の一部が不思議そうに眺めながら通り過ぎていく。

「どうしました、大丈夫ですか?」

気がつくといつの間にかポニーテールの女の駅員さんが心配そうに二人を覗きこんでいた。

「あ、大丈夫です。もう偏頭痛の人からは離れましたから」

「?」

幸司の応えの意味が判らず、駅員さんは笑顔を浮かべたままちよっと困ったように首を傾げ

る。

「大丈夫、こーちゃん？ もう行ける？ 立てる？」

「ん……もう、大丈夫、ごめん。それよりあかりこそ大丈夫？ お腹痛いんでしょ？ 特に下っ腹のほう」

「えっ」

「ここんとこ毎月3〜4日は必ずそんな日があるじゃん？ なんか悪い物でも食べたの？」

「……っ！」

幸司の言葉の意味に気がついたあかりは、みるみる顔を上気させていく。

「……………」

「え？」

「こーちゃんのばかあー！」

「うぼっ!？」

真っ赤な顔になったあかりに、いきなり学生カバンで思いつきり頭を殴られた幸司は、再びベンチに倒れ込んだ。

「もう知らない！ あたし、先に行くから！」

「ど、どうして……？ 僕なんか悪いこと言った……？」

プリアリしながら去っていくあかりの背中を、幸司は薄れゆく意識の中で見送るしかなかつ

た。傍らに立っていた駅員さんは（あゝ、やっちゃったわね〜）という感じで困ったような笑顔を浮かべながら、改めて幸司の介抱を始めたのだった。



「あかりのやつ、どうしてあんな急に怒っちゃったんだろう……？」

私立城星学院中学校。その昼休みの屋上。

抜けるような青空のもと、幸司はそう一人ごちた。

手許にはすでに空になったお弁当箱と、もうひとつまだ手つかずのお弁当箱があった。

どちらもお手製のスベシャル弁当だった。

幸司は実家が食堂を営んでいるということもあって、小さい頃から料理を作るのが好きだったのだ。

毎日あかりと二人で、手作りのお弁当をここで食べるのが日課となっていたのだが、今日は「あたし学食で食べるから！」と怖い顔をしてさっさと1年B組の教室を出て行ってしまったのだ。

「せっかく今日は初めてカニシユウマイを作ったのにな。やっぱり一人で食べると全然美味しくないなあ……」

いつもならあかりが座っているはずの場所を眺めながら、左手に箸を持ったまま幸司はふうと溜息をつく。

「なんだか判らないけど、とにかく後で謝ったほうがいいかな……でも何をどう謝ればいいんだろ……」

【1年B組、土師幸司は可及的速やかに漫研部室に来るように！ 今すぐに！ マッハで！ 10秒以内に！】

「ぶっ!？」

突然流れた校内放送に、幸司は飲みかけのバック牛乳を思わず噴いてしまった。

「今の声は西園寺先輩……あっ、そうか、しまった、忘れてた!」

幸司は慌ててお弁当箱をたたむと一目散に部室棟に走っていった。



「遅いっ」

「すいません!」

漫研の部室のドアを開けるやいなや、幸司は鋭い叱責の声に貫かれた。

目の前には黙々と原稿用紙にペンを走らせる黒髪の美女がいた。

漫研の部長である西園寺貴理子だ。

貴理子はメガネの奥の瞳を凛と光らせ、幸司を睨めつけた。

その視線のあまりの鋭さに、思わず幸司の背中には冷や汗がフッと流れる。

「まあいい。早くそこに座って作業を始めろ。時間がない」

「は、はい!」

この後どんな罵詈雑言が飛んでくるかと身構えていた幸司は、ほっとしながら自分の席にいた。

机の上には来月の文化祭に向けて、漫研が作っている同人誌の原稿がある。

もう文化祭まで時間がないため、昼休みも作画の時間にあててることを昨日部員全員で決めたばかりだった。他にも3人の部員が黙々と自身の原稿に向かってる。

「ん?」

ペンを握る幸司の指先にぴりりと軽い衝撃が走った。

そっと顔を上げて対面の貴理子の様子を盗み見る。

そこにはいつものように貴理子が右手に握ったペンの先から凄まじい勢いでキャラが生み出されていくのが見えた。

そしてその反対の左手人差し指に絆創膏が巻かれているのが確認できた。
 (びりびりびりびりって結構痛いな……割と深く切れてるんじゃないかな……)

「ん？ 何こつちを見ている、土師」

「あ、いえ、その絆創膏……」

「ああ、これが。土師も気をつける。新しい紙は結構すばつといくからな」
 「は、はい」

西園寺に言われて幸司はあわてて左手のペンを握り直す。

(あー、先輩、この原稿用紙で切っちゃったんだ……僕も気をつけようつと……)

幸司はちらりと貴理子の手許の原稿をちらりと見る。

(やっぱ先輩上手いなあ……)

幸司は感嘆の溜息をついた。

貴理子が描いている漫画は動物と会話ができる少年をめぐるものだった。

人物も、動物も、本当に生き生きと描かれていて、まるで今すぐにでも原稿から飛び出してきそうな躍動感に溢れている。

(僕も先輩ぐらい描けたらなあ……)

幸司は手許の自分の原稿を見て、今度はハアア〜と落胆の溜息をつく。

幸司が描いているのはロボット戦隊ものの漫画だったが、人物もメカも、明らかに貴理子の

作画に遠く及ばない稚拙なものであった。

(でも、まあ、自分に描けるものを描くしかないもんね)

幸司が作画に戻ろうとした瞬間、今度はお腹に強烈な違和感を覚えた。

痛みでもなく、痒みでもない。この感覚は……

ぐううううううううう

幸司の腹が盛大に鳴った。

そうだ、この感覚は「空腹」だ！

「どうした、土師。昼はまだ食べてないのか」

貴理子が幸司に問いかける。

他の部員達もあまりに盛大な腹の音に、皆笑うのを我慢している様子だった。

「あ、いえ、さつきお弁当食べたばかりだから大丈夫です。……なんでお腹なんて鳴るんだろ。おかしいな。あ、それより……」

「それより？」

「西園寺先輩の方こそ、お腹、すいてるんじゃないですか？」

「な、何を言……」

ぐうううううううう

今度は西園寺先輩方面から盛大に腹が鳴る音がした。

「……わ、私は空腹などでは、ない……」

貴理子はちよつと顔を紅らめながら、説得力のない返事をする。

他の部員達は先ほどのように笑うわけにもいかず、とりあえず貴理子から目を逸らして原稿に集中する振りをしていた。

「あの、良かったら、このお弁当食べてもらえませんか？　ちよつと事情があつて余っちゃつて……」

「なに？」

言うが早い、西園寺は幸司からひつたくるように弁当箱を奪い取つた。

「……そんなにお腹すいてるんですか、先輩」

「ば、ばか言うな！　土師がどうしても食べてくれというから仕方なく食べてやむしやむしや！」

西園寺は台詞を言い終わる前に既に箸を手にとつて玉子焼きに手をつけていた。

「美味いな……！」

玉子焼きを食べ終わった西園寺は心底感心した表情でそう呟いた。

「土師の家のお婆さんはすごい料理が上手なんだな」

「いえ、それ僕が作ったやつです」

「えっ」

貴理子の手がびたりと止まった。

「この、れんこんのはさみ揚げも土師が作ったのか？」

「はい」

「このカニシユウマイも？」

「はい」

「このタコさんウィンナーもか?」

「はい。……つていうかそれは焼くだけですから」

西園寺はあつという間に弁当を完食してしまった。満足げな表情で余韻を楽しんでいる様子だ。よほど空腹だったに違いない。

「あの、良かったら明日から西園寺先輩の分のお弁当も作つてきましようか？　2つ作るのも3つ作るのも一緒なんです。材料費も200円くらいもらえば間に合いますし。それに僕、そういう風に美味しそうに食べてもらえるの、大好きなんです」

「……そ、そんなに美味そうに食べていたか、私は？」

「はい、とつても！」

ニコニコとそう応える幸司に、貴理子は思わず顔を逸らしてしまふ。その頬ほおは気のせいかさし紅らんでいるように見えた。

「土師がそこまで言うんじゃしょうがない、た、頼んでやるか……」

なぜか消え入りそうな小さな声で貴理子はそう応えたのだった。



「へー、じゃあ、そのもう1個は西園寺先輩の分なんだ」

「うん」

ご機嫌そうに鶏の唐揚げを口に運ぶあかりに、幸司は軽く首肯した。

なんだかよく判らなかつたけど、とにかく朝、一生懸命謝つてみたら意外にもあかりはすぐ許してくれたのだ(何を怒っていたかは結局さっぱり判らなかつたけど)。

もうお腹も痛くないようだし、単に体調のせいだったのかもしれない。女の子って難しい。

「今日も部活行くの？」

「うん。もう文化祭まで時間ないし。追い込みだから」

「あのおさ……」

「うん？」

あかりは幸司から少し目を逸らし、逡巡しゆんじゆんするような様子を見せた。

やがて躊躇ためらいがちに言葉を接ぐ。

「こーちゃんの漫画……できたらあたしにも読ませてくれる？」

「うん、いいよ。でも少女漫画とかじゃないから、あかりにはちよつとつまらないかもしれないけど……」

「ううん、いいの。あたしはこーちゃんが描いたものを読みたいの！」

あかりはにっこり笑つてそう応えると、また勢いよく唐揚げをひとつつ口の中に放り込んだ。



「遅いっ」

「えっ!？」

部屋に入った瞬間、貴理子は幸司から弁当箱べんとうばこを強奪する勢いでもぎとつた。

「……先輩、そんなお腹空いてるんですか？」

「ばっ、ばか！ そんなわけないだろうが！ ほら200円！ もぐもぐもぐもぐ」

猛烈な勢いで唐揚げを頬張る貴理子を見て、幸司は思わず笑えみを浮かべた。

「あれ？ 山崎先輩と金光先輩はいないんですか？」

「ああ、あいつらは今日図書委員で休みだ。それより土師、君田は？ もぐもぐもぐもぐ」

「今日は風邪で休みみたいです」

「そうか、じゃあ、今日はこれで全員か……もぐもぐもぐもぐ」

すごい勢いで弁当を平らげた貴理子はごくりと喉を鳴らしてペットボトルの紅茶を飲み干した。

「よし。じゃ、早速作画を始めるぞ」

「はい！」

幸司は元氣よく返事をして席に着いた。

しかしペンを握った瞬間、幸司の左手にずきりと鋭い痛みが走った。

「っ!？」

「どうした、土師？」

思わずペンを取り落した幸司に、貴理子が怪訝そうに声をかける。

「な、なんでもないです……」

そう応えた幸司は、その時初めて貴理子の両手が白く薄い手袋に包まれていることに気が付いた。貴理子は原稿を汚さないために指ぬき手袋をすることはよくあったが、今着用しているのは指先までずっぴりと包まれる、いわゆる普通の手袋だった。

「あ、あの……」

「なんだ？ どうした？」

「先輩の左手の怪我、ひどくないですか？ 保健室行ったほうが良くないですか？」

「!」

貴理子はとっさに両手を自分の背中の後ろに隠した。

「わ、私は怪我などしていません……」

「そんなに痛かったら原稿に集中できないでしょう？」

「あ……」

幸司はやや強引に貴理子の左手をとると、その手袋を外した。

出てきたのは幸司の予想通り、切り傷と絆創膏だらけの指だった。

「どうして……わかった……?」

「先輩、いつもよりペンの運びが遅かったし、絵もノってないように見えましたから……」

「そうか……やっぱり判るか……」

幸司の嘘の説明に、貴理子はがつくりと肩を落とした。

「私は全然料理ができないんだ……」

「えっ?」

突然の告白に、幸司は戸惑った。

「おととい、母親が突然入院してしまつてな。父親は単身赴任だから幼い弟と妹のご飯は私が作らなくてはいけないんだが……ご覧のありさまだよ。包丁ひとつ満足に扱えない……」

貴理子は自嘲気味にそう呟いた。

「がっかりだろう……こんな料理ひとつ作れない女なんてな……」

「そんなことないですよ！」

幸司の大声に貴理子はびくつと肩を震わせた。

「そんなことないです。西園寺先輩ならきつと美味しい料理を作れるようになります。だって……」

「だって？」

「だってそんなに繊細な絵が描けるじゃないですか！ 絵心のある人は必ず立派な料理人になれる素質があるんです！ うちの食堂をひらいたばあちゃんがそう言つてました！」

「そ、そうか……」

「それにそんな一生懸命料理を作つてあげるなんてすごいです！ 料理は技術より心ですよ！」

「お、おう……」

幸司の勢いに気圧されて、貴理子は呟くように返事をした。

「先輩、文化祭が終わつたら一緒に料理をしてみませんか？」

「え？」

「初歩の初歩から一緒にやれば、先輩、すぐに上手くなりますよ」

「そ、そうかな？」

「そうですよ！ それに一人で作るより二人で作るほうが美味しくできます！」

「そういうものか？」

「そういうものです！」

幸司はそう言つてにつこり笑つた。貴理子もつられて小さく笑みを浮かべる。

「そうか……じゃ、じゃあ、今度一緒に……」

ぐううううううう

応えかけた貴理子の腹がまた盛大になった。

「……先輩、まだお腹が空いてるんですか？」

「……弟と妹にはなんとか食べさせたんだが、昨日の夜から自分が食べる時間がなくなつて……ずつと原稿をやっていたし……」

貴理子はバツが悪そうに視線を逸らしながら小声でそう呟いた。

「判りました！ じゃあ、今日の夜から僕、先輩の家に出張料理人します！」

「え？ いや、それはさすがにいくらなんでも悪……」

「先輩の原稿を万全にするためです！ 先輩も文化祭までは作画に集中したいでしょう？」

「……………じゃあ、頼む……………」

頬を紅らめながらそう応えた貴理子の顔を見て、幸司は初めてこの能力ちからを授けてくれた神様に感謝をしたのだった。

おしまい